

# ソウル都城における宮殿の位置づけに関する研究

朴 賛 弼

## A Study about Positioning of the Palace in Seoul castle wall

PARK Chanpil

Five palaces were in Seoul. It is Kyongbok Palace Changdok Palace, Changgyung Palace, Doksu Palace, Kyonhee Palace. A purpose of this study is that current Seoul clarifies what kind of plan space has been built under in the past. It is to make the positioning clear how a palace was planned in Seoul castle wall. I analyzed the north and south of the palace in the Seoul castle wall, East-West axis constitution as a study method. I compared the axial constitution in each palace and analyzed it. And I made each characteristic clear.

Kyongbok Palace became clear in being the place that fulfilled each seeing from a geography mark of the Feng Shui. In addition, it was revealed that five palaces were constructed equally with the mountains of four directions.

In Changdok Palace, Changgyung Palace, a scale becomes small to some extent from Kyongbok Palace. Kyongbok Palace becomes straight from the gate to politics, life space in the north and south. In Changdok Palace, Changgyung Palace, north and south key is not decided clearly.

Key words: Seoul, Five Palaces, Positioning, axis constitution, Feng Shui, geography mark, four mountains, castle wall

## 1. はじめに

現在のソウルは600年以上の歴史を持ち、人口一千万人を越える大都市である。かつての都市ソウルが内包していた機能や文化が失われていく中、今迄いろいろな視点でソウルに関する研究は行われていたが、都城における宮殿の研究は数少ない。ソウルには五つの宮殿があるが、その宮殿の名は景福宮、昌徳宮、昌慶宮、徳壽宮、慶熙宮である。

本研究の目的は現在のソウルが過去においてどのような計画のもとで空間が構築されてきたかを明らかにすることである。具体的にはソウル都城の中における宮殿がどのように計画されていたかをその位置づけを明確にすることである。研究方法としてソウル都城における宮殿の東西、南北の軸構成を分析した上に、各宮殿における空間構成と軸線を比較分析した。

## 2. ソウルの都市計画

「ソウル」という言葉は、19世紀後半から使われるようになり、「首都」という意味を持っている。以前は、漢陽（のち漢城）と呼ばれていて、日本でいえば東京を江戸という感覚で韓国の人々に親しまれてきた。

漢陽が都として最初に定着した時代としては、百済からで、当時、高句麗の侵略を避けるため、約120年間漢陽に都を創った。その後、高麗が朝鮮半島全土を統一し、都を開城に移している。1329年に高麗の最後の国王李星桂は、国号を朝鮮にし、首都を開城から現在のソウルに移し（1394年）、新しい国を創った。この新しい国は、当時の学者を中心に計画されたが、図1のように風水をもとにされた神秘的で理想的な国都を計画したのである<sup>1)</sup>。

李太祖は風水思想を重んじ、風水がよければ新しい王朝も栄えると信じていた。李太祖が即位した翌年、正宮殿である景福宮を建て朝鮮の歴史は幕を開け始めた。朝鮮時代は古くから風水思想によって土地を決めていた。「気」の流れを重視し、その流れが強いところは山となっていて、そのふもとが「穴」となり「気」が吹き出す。この「穴」から「気」を受けられる場所を国の首都として選んでいた。条件の良い場所で「気」を受けることが出来たら、国家全体が安泰となるという考えからである。つまり、風水的に優れた土地という場所は、東西南北に山があり、北の山から東西に尾根が広がっている盆地でなくてはならず、また、その盆地の中に川が流れていなくてはならない。川が重要とされたのは、川の流れにのって「気」を運んでく

1) 朴賛弼著『ソウル清溪川再生』鹿島出版会、pp. 11-12、2011年12月。当時のソウルについて風水説をめぐる論争が「朝鮮王朝実録」に記録されている。王朝は都探しに必死で、徹底的に研究した結果、選んだのが今のソウルである。

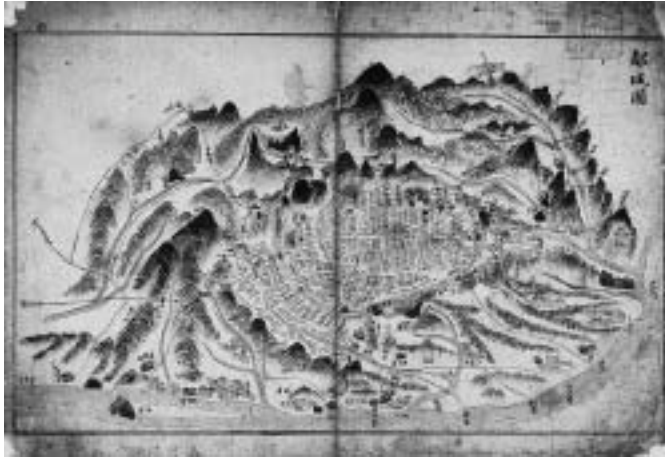


図1 ソウル古地図（ソウル大学ジャンソカク）、風水思想からみて見事な空間構成になっている

るとされていたからである。

以上のことを念頭に置き、図1から漢陽ソウルの地図を見てみると東に駱山、西に仁旺山、南に南山、北に北岳山があり、山が見事に土地を囲んでいる。また、盆地の外郭を漢江が流れ、その支流（清溪川）が盆地の内側を互いに逆方向に流れている<sup>2)</sup>。

風水の基本理念である「背山臨水」「四神相応」といった観点から見ても一致が見られる。背山臨水は、山を背にし、前が川となっているもので理想の形とされているが、漢陽（ソウル）の地形は、北岳山を背に前は清溪川と漢江がながれているという点で、この背山臨水にあてはまる。四神相応は、四方向が山に囲まれ、北は玄武、南は朱雀、東は青龍、西は白虎といった動物にたとえられた神が守ってくれるという意味合いであるが、先ほど述べたように対応した山々が存在し、それぞれの保護を受けている（図2、図3参照）。

また、東大門、西大門、南大門、北門という、四神から守られている四つの大門とその間に四つの小門があり、景福宮は、その中に建設されていることから、漢陽（ソウル）という都の中の景福宮の位置づけは、非常に重要なものであった。このことから、ソウルは風水的に相応しい土地であり、この土地の「穴」となりうる場所に景福宮を置くことによって、さらなる国の発展を願ったものだと思う。

李太祖が都を開城から漢陽（ソウル）に移した理由は、風水思想的視点だけから見られるこ

2) 朴賛弼著『ソウル清溪川再生』鹿島出版会、p. 14、2011年12月。逆方向の巴の形は風水からみて極めて吉地とされている。

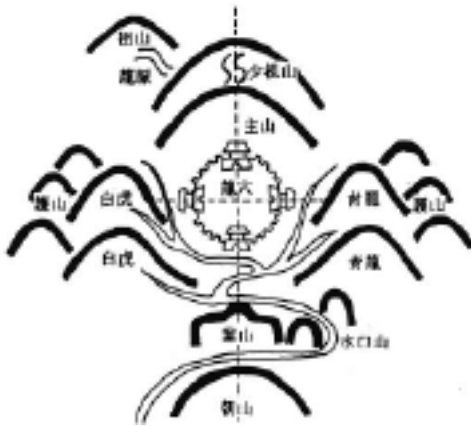


図2 山局図、風水の概念図

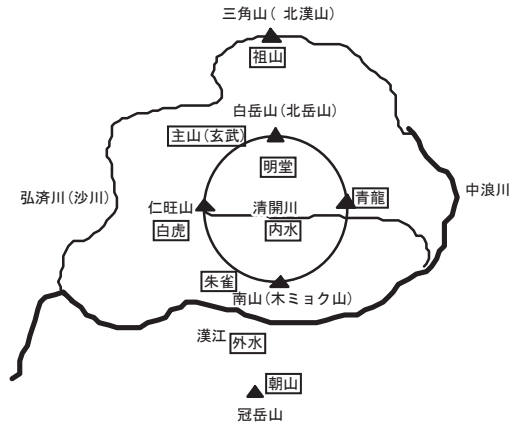


図3 ソウルの風水地形図

とが多いため、注意しなければならない。首都を決める際、もちろん風水思想が重要であったことは事実であるが、ソウルが風水的に良いというよりは、国が政治的な視点から首都を考えた時に、ソウルの地形の利点に気づき遷都した<sup>3)</sup>ということも考えられるのではないだろうか。

ソウルは朝鮮半島の中央に位置し、そのすぐ南には漢江が流れている。漢陽は地理的に朝鮮半島の中心であるだけでなく、河川、海を利用した舟運の点からも最も利便性の高い場所であった。現在の道路や鉄道はソウルに集中しているが、昔もこれと似たようにソウルに集中する多くの河川が交通等のために重要だったはずである。つまり、貿易や交通のためソウルという土地が非常に有利であることが明らかになり、さらには風水的に良いとされる盆地が防衛ということもあって、ソウルへの遷都は自然な流れであり、風水だけで決定されたわけではないこともあえて注目したい。

### 3. ソウル都城における宮殿の軸構成

風水思想からみたソウル都城の周辺の山と五つの宮殿の軸を水平および垂直の観点から分析した。等高線図をもとに、北岳山、南山、駱山、仁旺山の位置、高さを割り出した。図4から五つの宮殿の中で景福宮をP1、昌徳宮をP2、昌慶宮をP3、慶熙宮をP4、徳壽宮をP5とした。

図5、6は東西・南北方向の山を結んだ直線で切断した断面図である。図6より、南北方向

3) 朴賛弼「漢陽・ソウル水辺における都市基盤形成に関する研究(その1) 近代以前の麻布・龍山・西水庫を中心としたナルの存在と機能について」『民俗建築』第130号、日本民俗建築学会、pp. 5-14、2006年11月。

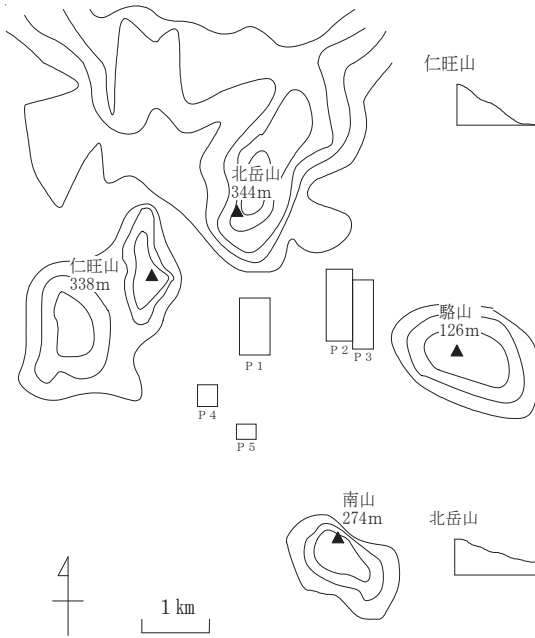


図4 各宮殿の軸ポイント

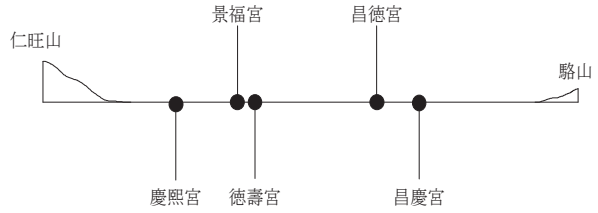


図5 各宮殿の東西軸

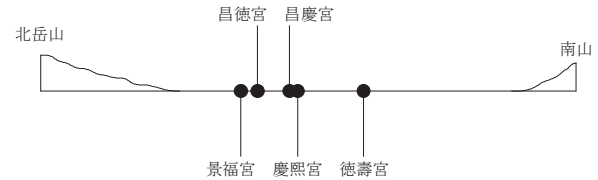


図6 各宮殿の南北軸

の各宮殿の位置関係はそれほど離れていないことが分かる。これに対し、図5より、東西方向の各宮殿の位置関係は大きく広がっていることが判明した。このことよりソウルの宮殿は景福宮を中心とした位置関係になっていることがわかる。各宮殿から四方の山々の距離を測定した結果を表1、図7～12で表した。

これらの図から景福宮と徳壽宮はX軸に対して線対称、昌徳宮、昌慶宮と慶熙宮はY軸に対して線対称に近い。この結果として風水思想からみた四神相応となる山と宮殿の遠近関係は次の通りである。主山（玄武）となる北岳山と一番近い宮殿は景福宮であり、一番遠い宮殿は徳壽宮である。青龍である駱山と一番近い宮殿は昌慶宮であり、一番遠い宮殿は慶熙宮である。案山（朱雀）となる南山と一番近い宮殿は徳壽宮であり、一番遠い宮殿は景福宮である。また、白虎である仁旺山と一番近い宮殿は慶熙宮であり、一番遠い宮殿は昌慶宮である。

以上のようにそれぞれの宮殿は四神相応の山と最遠・最近の関係を持っていることがわかる。しかし、昌徳宮だけが無関係になっている。昌徳宮には世界遺産になっている「秘園」がある。「秘園」は昌徳宮の庭で自然豊かな場所である。図12は各宮殿をまとめたものであるが、このグラフを見てみると、景福宮が一番小さいグラフを描いていることが分かる。これは景福宮と四

表1 各宮殿における位置表 (km)

	北岳山	駱山	南山	仁王山
景福宮	1.635	2.887	3.112	1.832
昌徳宮	2.173	1.632	3.050	2.989
昌慶宮	2.457	1.276	3.061	3.325
慶熙宮	2.483	3.681	2.738	1.792
徳壽宮	3.048	3.324	1.893	2.618

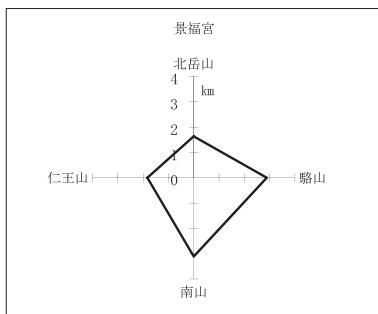


図7 景福宮の軸

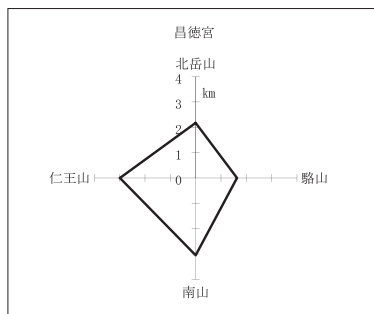


図8 昌徳宮の軸

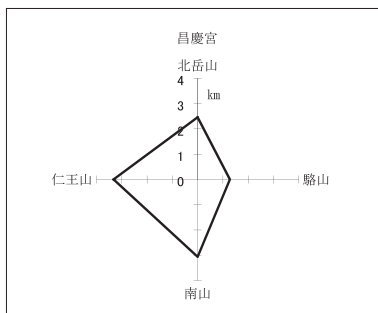


図9 昌慶宮の軸

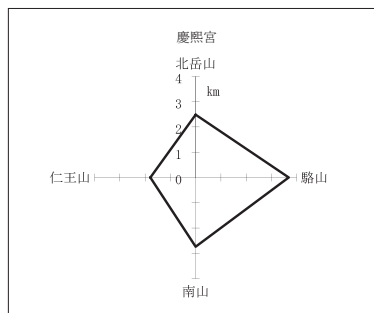


図10 慶熙宮の軸

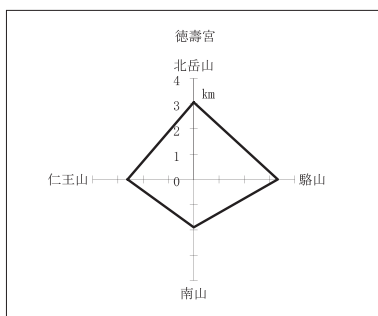


図11 徳壽宮の軸

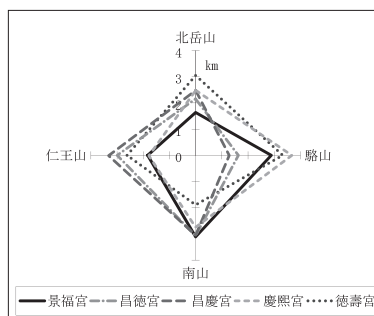


図12 各宮殿の総合軸

方の山々との距離が一番近いからである。一番近くにあるということは風水的にも気の流れが一番良い場所であり、また外敵からの侵入を防ぐのにも役立っていると言える。すなわち、五つの宮殿の中でもヒエラルキーが一番高い宮殿である。以上の分析から正宮である景福宮がこのような配置になっていることは風水的観点、地理的観点、数値的観点から見てもそれぞれに当てはまっている場所であるということが判明した。また、五つの宮殿は四方向の山と均等に構成されていることが明らかになった。

#### 4. 各宮殿における空間構成と軸線

韓国における王宮は正殿が南を向いていることや正殿の前には東西方向に川が流れていることである。川は宮殿のアプローチの演出手段として使ったため、宮殿の空間構成には自然の川の流れが重要な要素として使われたといえる。これらは日本の神社、寺でもよく見られることである。神社では鳥居から正殿へ行くまでの空間に川を導くところによって聖域を高めるという意味を持っている。宮殿に流れる川は明堂水として扱われ、その名は錦川または禁川と呼ぶ<sup>4)</sup>。

清溪川の支流の自然のままに利用することで各宮殿における川と正殿などその配置は異なりそれぞれの特徴を持つ。宮殿の空間構成として軸線上に①公式行事空間、②政務空間、③生活空間が並んでいる。王宮の主要な建物は公式行事をする場所、日常の政務を行う場所、私生活を行う場所がある。各宮殿における軸線を分析し、それぞれの空間構成についてその特徴を浮き彫りにした。

##### ・景福宮

景福宮のそれぞれにあたる建物は、①勤政殿、②思政殿、③康寧殿・交泰殿となり、南北軸線上に建てられている（図13参照）。

まず、最初の二つの門（光化門、弘礼門）をくぐると川が西から東へと流れている。この川を渡り、勤政門をくぐると正面に勤政殿が建ち、前には公式行事空間が広がっている。景福宮の錦川にかかる石橋付近にはヘテ（ヘチともいう）という魔除けの石造物があるが、これらは、川から侵入しようとする鬼を防ぐ意味を持つ。川は外の俗界と、内の厳粛な聖域を分けるもので、橋は聖域へ入るための象徴的な意味を持っている。

勤政殿の奥へまわると、日常の政務を行う三つの建物がある。思政殿・万春殿・千秋殿であ

4) 朴賛弼『ソウル清溪川復元における都市構造の空間構成に関する研究』法政大学大学院エコ地域デザイン研究所研究成果報告書、pp. 49-50、2007年7月。

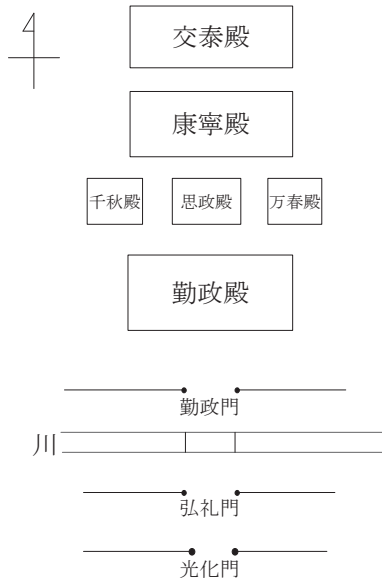


図13 景福宮の動線軸



写真1 景福宮

る。万春殿と千秋殿は板張りではなくオンドルになっているので、主に冬に使われたと思われる。この三つの建物の後ろに日常生活を送る康寧殿と交泰殿がある。康寧殿と交泰殿はそれぞれ王と王妃の寝殿である<sup>5)</sup>。

#### ・昌徳宮

昌徳宮のそれぞれにあたる建物は、①仁政殿、②宣政殿、③大造殿・熙政堂である（図14参照）。建物を自然景観と合うように西から東へと配置した。そのため、景福宮のように直線的に川を渡り政殿までのたどり着く道のりとは違い、川を渡ってから直角に折れ曲がり政殿へとたどり着く配置となっている。これは北に山があることから川の流れは北→南へと流れるのだが、一方で正宮としての形式も考慮して、政殿の北方向には風水的観念から山がなくてはならない。昌徳宮はこの両方の要素を組み合わせた結果、このような配置になっていると考えられる。建物は西から東へ行くにつれ、①→②→③の順に後方に下がるように配置されている。

昌徳宮の正門である敦化門は木造二重楼閣づくりである。景福宮の正門である光化門も石造

5) 朴賛弼・古川修文「歴史都市漢陽・ソウルの都市形成の基礎的研究・その3 滅失・再生された景福宮・昌徳宮寝殿の考察」『民俗建築』第127号、日本民俗建築学会、pp. 50-57、2005年5月。



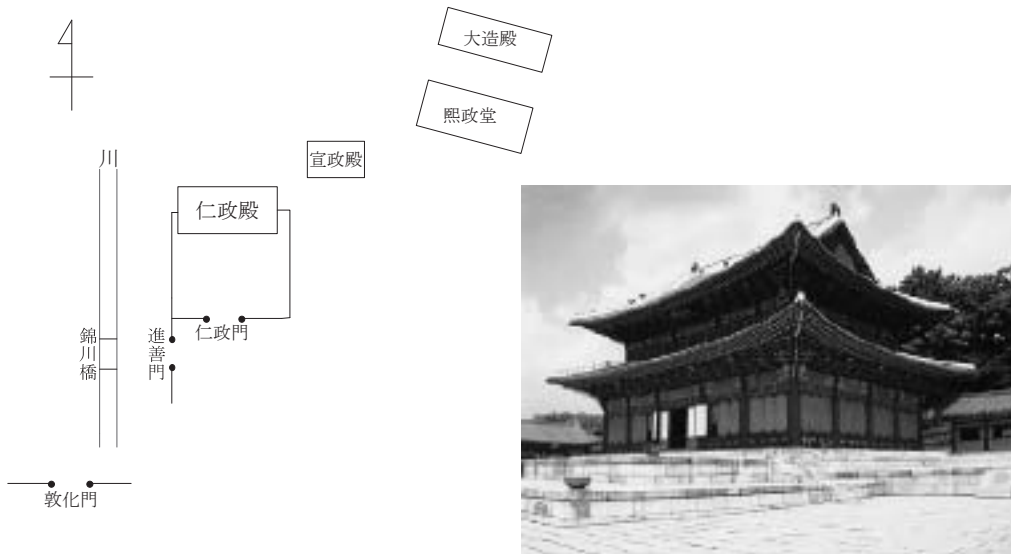


図14 昌徳宮の動線軸

写真2 昌徳宮

りの二重楼閣であり、その他の門も石造りの単層楼閣になっている。景福宮は門を城塞のような造りにしているが、景福宮以外の王宮の門は木造で、城塞のような造りにはしていない。景福宮は正宮であったため、防衛とヒエラルキーを高めたと思われる。

#### ・昌慶宮

昌慶宮のそれぞれにあたる建物は、①明政殿、②景春殿、③通明殿・養和堂となっている（図15参照）。昌慶宮は生活重視の王宮として造られた。そのため他宮殿とは異なる部分が多く見られる。まず門から正殿までであるが、本来は正殿までに三つの門をくぐる三門形式をとっているのに対し、昌慶宮の場合は二つ門をくぐれば正殿へ着く。公式行事をする場所ではなかったため狭く造られたと言われている。また、正殿である明政殿も公式行事に使うことを考えていなかったため小さく造られた。景福宮の勤政殿が側面五間、昌徳宮の仁政殿が側面四間の二重構造で建てられているのに対し、明政殿は単層構造の正面五間、側面三間で造られている。王宮全体として景福宮、昌徳宮と比べると規模が小さくなっているとはいえ、やはり王妃の寝殿である通明殿には大棟がない。王と王妃の寝殿に大棟をつけない理由としては多くの説がいわれているが、一般的には、大棟は竜骨ともいわれ、竜は王を象徴するものであるためだといわれている。

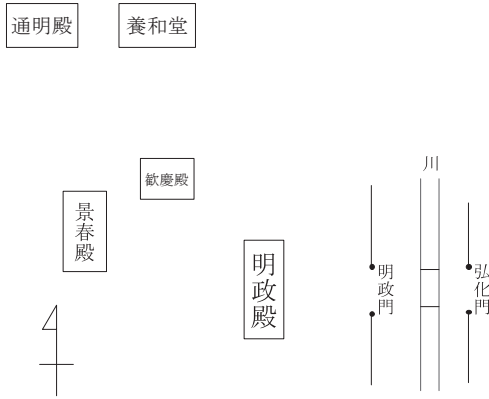


図15 昌慶宮の動線軸



写真3 昌慶宮

昌慶宮は王宮が東向きに建てられている。地形的に南、西、北が山に囲まれていて、東はるか遠くに駱山があることから風水的にこのように建てた方が理にかなっていた。また、無理に南向きに建てると他の王宮の気の流れを断ってしまうという問題もあった。

• 徳壽宮

徳壽宮のそれぞれにあたる建物は、①中和殿、②徳弘殿、③咸寧殿となっている（図16参照）。徳壽宮は1592年の壬辰の乱（文禄の役）により景福宮、昌慶宮など、王宮は残らず焼け落ちてしまった時の臨時の御所であるが、宣祖は1608年の崩御の年まで、16年間をここで過ごした。その後も徳壽宮は正宮→別館→正宮とその使用方法が時代に合わせて変化している。

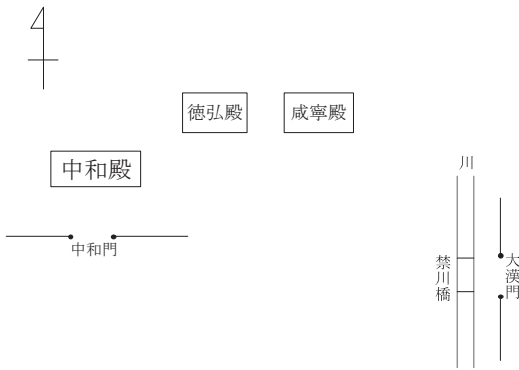


図16 徳壽宮の動線軸



写真4 徳壽宮

徳壽宮は仮の王宮ため他宮殿とは異なる部分が多く見られる。まず門から正殿までであるが、本来は正殿までに三つの門をくぐる三門形式をとっているが徳壽宮も昌慶宮と同じく二つ門をくぐることで正殿へたどり着く。川を渡り直角に曲がった後、門をくぐり政殿にたどり着く配置は昌徳宮と同じである。元々は正宮としての役目をする宮殿ではなかったため全体的に規模が小さいのは否めない。中和殿は単層構造の正面五間、側面四間で造られている。

#### ・慶熙宮

慶熙宮のそれぞれにあたる建物は、①崇政殿、②資政殿、③泰寧殿となっている（図17参照）。慶熙宮は朝鮮後期の離宮であった。門から正殿までであるが、三門形式ではなく二つ門をくぐることで正殿へたどり着く。また慶熙宮も川を渡り直角に曲がった後、門をくぐり政殿にたどり着く配置は昌徳宮、徳壽宮と同じである。崇政殿は単層構造の正面五間、側面四間で造られている。

五つの宮殿に共通して言えることは門を入れてすぐに川が流れている点である。川は山からの清らかな気を運んでくると考えられており、常に清らかな気が宮殿に流れ込むように、と川の近くに宮殿が建てられた。景福宮や昌慶宮のように宮殿の向きに対して直交するように川が流れている。しかし、昌徳宮、徳壽宮、慶熙宮のように、川の流れる方向と宮殿の向きが平行になっている場合もある。しかしその点はアプローチ方法を変えることで、宮殿は南向きで、かつその前に川を渡るという条件が満たされている。

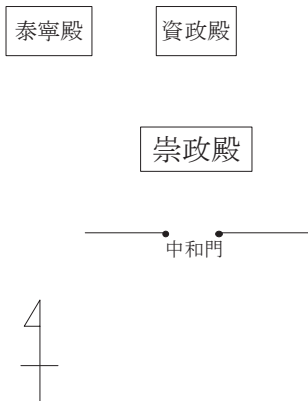


図17 慶熙宮の動線軸



写真5 慶熙宮

## 5. まとめ

風水的に優れた土地とは、まず東西南北に山があり、北の山から東西に尾根が延びているところでなければならない。ソウルはその条件を満たしていたわけである。そのため正宮殿である景福宮は風水的にも最も良いとされる場所に建てられた。

景福宮は多くの関わり合いを持つ昌徳宮、昌慶宮と比較した結果、その特徴は歴然である。昌徳宮、昌慶宮も初めから正宮として造られた訳ではないので多少規模が小さくなっている。また、門から政治、生活空間まで南北に一直線になっている景福宮に対し、この二つの王宮は南北軸がはっきり定まっておらず、ここが大きな違いである。

以上のことから、景福宮は朝鮮時代では最も重要で、かつ特徴的な王宮であったといえる。特に朝鮮時代の宮殿は日本と中国と深いかかわりを持つ。日本も中国も碁盤目状の道の奥に宮殿が建設されているという形態をとり、宮殿はしっかりと南を向いている。このように、日本や中国にも風水的な思想があったと考えられ、また中国は風水発祥の地でもあることから日本よりもその傾向が強いのである。中国の洛陽城は門の前の川が東西をまたいでいるが、これは韓国と共通している。

ソウル（漢城）は町が城壁で囲まれており、その城壁の中全体が城内である。それに対し日

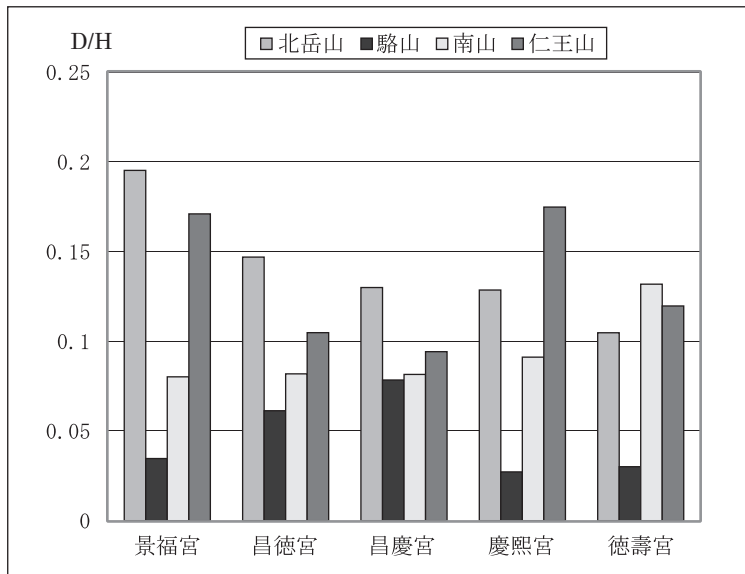


図18 五つの宮殿と4方向の山との距離比

本は、城下町と隔てるように堀をつくり、その中に城を築いた。中国に関しては町を城壁で囲むという点で韓国と同じであるが、さらにその中に城壁を築いて城をつくるという点では異なっている。

図18はソウル都城における周辺の山と各宮殿の距離と高さの比である。Hは4方向の山と各宮殿の距離で、Dは4方向の高さである。この比の数値が高ければ高いほど宮殿と山の間は広い空間が出来て開放的空間となり、逆に数値が小さければ小さいほど狭い空間であり、閉鎖的空間となる。以上のようにソウル都城における宮殿の位置づけに関する、東西南北の軸構成と空間構成について明らかにした。

#### 参考文献

- 1) 朴賛弼『ソウル清溪川再生 歴史と環境都市への挑戦』鹿島出版会、2011年12月。
- 2) 朴賛弼『ソウル清溪川復元における都市構造の空間構成に関する研究』法政大学大学院エコ地域デザイン研究所、2007年7月。
- 3) 朴賛弼『民俗建築』第130号、日本民俗建築学会、2006年11月。
- 4) 朴賛弼・古川修文『民俗建築』第127号、日本民俗建築学会、2005年5月。
- 5) 『ソウル建築歴史』ソウル特別市、1999年。